



こんな映画を観てきた

雨の訪問者

1970 仏

監督:ルネ・クレマン

★チャールズ・ブロンソン

★マルレーヌ・ジョベール

ルネ・クレマン監督で、フランス・レイ音楽とくれば、内容はともかく“雰囲気”は推して知るべしであるが、とにかくメリーの可愛らしさにはまいった!!

昭和の“沁みる”唄

八月の濡れた砂

作詞:吉岡 治

作曲:むつ ひろし

唄:石川 セリ

あたしの海をまっ赤に染めて
夕日が血潮を流しているの
あの夏の光と影は
どこへ行ってしまったの
悲しみさえも焼きつくされた
あたしの夏は明日もつづいた!!

10.May.2021

Vol.24

お楽しみはこれからだ 5月は『あやめ』

YAH!

ヤー! YOU AIN'T HEARD NOTHIN' YET!

新宿の夜

こんな唄を聴いてきた、

恥ずかしながら唄ってもいた…

どんな曲でも弾いてくれたギターの“先生”、一度だけ店のオーナーからギヤラを手ずから受け取っているのをエレベーターの前で見たことがあり、少なくともこちらの給料など問題にならなくらいの額であったことを覚えている。そりゃあそうだろう…悔しくも情けなくも無かった、ただただ呆れるばかりであった。

こっちに来ないで!

「東京には来ないで、外に出て行かないで…」、「此方には来ないで、東京には行かないで…」、まるで、「言う事を聴けない連中は〇〇だ」と言わんばかりだ。勢いばかりで何も響かない、誰が誰に言っているのだろうと、ただうんざりさせられるばかりだ。考えてみれば、メッセージがちゃんと届いているからこそうんざりする訳で、それが大半、大方の人々であり、これ以上どうしろと反論もしたくなる。問題は、そうしたメッセージが届かない層、この人たちに“響く”発信の仕方を考えるべきだろ

ごくたまにこちらの申し出た曲を知らないということになると(記憶の彼方だが、『ふりむしないで』だったような気がする)、閻魔帳(唄本、総合カタログだったか、それとも分厚い手製のファイルだったか???)を取り出して、程無く見付け出し、更にそれを見ただけで速やかに対応してくれた、感心頻りだが、それが“仕事”というものなのだろう。カラオケというものがまだ出発地だったもう40年以上もの大昔のことである。

う。知らないこと(知りたくないことは聞こえないふりをして…)は如何ともしがたく、意識の擦れ違いというか、次元のちがうところで情報が錯綜どころかまったくの迷子になってしまっている。普通の暮らしをしている人が「今、我慢させられているんだ」などと確認させられたり、逆に“たまの息抜き”なんぞと軽々しく言ってしまう開き直り、世はまさに混沌であり、ワクチンだけが頼りだというのでは、情けないというほかはない、もっと他にも何か“て”はあるだろう!